



# 日本における「ビードーマイヤー」研究：日本文化史理解のよすがとして

廣田，吉崇

---

(Citation)

日本文化論年報, 12:81-100

(Issue Date)

2009-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001516>



# 日本における「ビーターマイヤー」研究——日本文化史理解のよすがとして——

廣田 吉 崇

一 はじめに——江戸とベルリン、日本とドイツ——

十一代將軍徳川家斉の長い治世が続く江戸後期、一枚の版画が世間を驚かせた。葛飾北斎の『凱風快晴』いわゆる『赤富士』（一八二九（文政十二）年頃）である。

現代のわれわれにはすぐれて日本的と感じられるこの絵であるが、その印象的な空の色には西洋から到来した当時最新の顔料が用いられている<sup>1</sup>。「ペロ」とよばれたプルシアン・ブルーがなければ、北斎もこのような空の青さを強調する構図の絵を描かなかったかもしれない。

この絵を目にするとき、鎖国・封建制社会という閉塞的なイメージのある江戸時代に、庶民のささやかな楽しみである浮世絵にさえ、新たな海外技術が積極的に導入されていたことにあらためて気付かされる。

このプルシアン・ブルーが初めて作られたのは、プロシアのベルリンである<sup>2</sup>。プルシアンはプロシアの形容詞形、ペロはベルリンに由来する。遠い世界に思える当

時の日本とドイツには意外な関係がある。北斎と同時代の十九世紀前半のドイツは、近代市民社会の形成期にあった。市民階級は、政治経済のみならず、それまで王侯貴族の専有物であった文化の領域にも進出した。その結果、絵画、工芸、文学などの分野で市民文化が開花し、さまざまな学問、科学技術が発展した。また、自民族の歴史・伝統に対する関心が深まり、それが民族的覚醒をもたらした。この十九世紀前半にドイツで起こった文化現象は、「ビーターマイヤー」<sup>3</sup>という言葉でよばれている。これは、欧州の近代市民社会形成期に共通する市民文化的現象の一環であり、そのドイツ的表現でもある。

近現代史における日本とドイツとの並行性はよく指摘されるところであるが、本稿では、日本におけるビーターマイヤー研究を概観し、比較文化の視点から十九世紀前半の日本とドイツの市民文化について若干の考察と問題提起を試みたい。

なお、十九世紀前半には「ドイツ」という名の国家は存在していない。例外的に明らかに国家名として用いる場合をのぞき、本稿では、オーストリア、プロシア等をふくむドイツ語文化圏またはドイツ語系住民の居住圏の意味において「ドイツ」を用いることとする。

## 二 ビーダーマイヤーの概観―その誕生と展開―

### 1 ビーダーマイヤーとは何か

―十九世紀前半のドイツの市民文化―

まず、ビーダーマイヤーという言葉について確認しておく。平凡社版『世界大百科事典』によると、「一八一五年から四八年までの（復古期）におけるドイツとオーストリアの家具調度、美術、文学等の様式、ならびにその時代の小市民的な生活感情を示す言葉」<sup>4</sup>と定義されている。フランス革命、ナポレオン戦争を通じて、近代市民社会の概念がドイツにも浸透し、ドイツのナショナリズムが高揚した後、メッテルニヒが主導した復古主義的なウィーン体制のもとで市民階級は大きな政治的挫折を味わざるを得なかった。その閉塞的状况のなかで、

人々は政治に背を向け、日常的・個人的事柄に楽しみと安らぎを見出した。政治社会史では、広義の「三月前期」<sup>5</sup>とよばれるこの時代について、文化史では「ビーダーマイヤー時代」、「ビーダーマイヤー文化」、「ビーダーマイヤー様式」などの表現が用いられる。

この言葉は、「実直な、誠実な」という意味の「bieder」とドイツの一般的な姓「Möller」を結合して創出された人名である。アイヒロット（一八二七―一八九二）とクスマウル（一八二二―一九〇二）の二人が、絵入り風刺雑誌『フリーゲンデ・プレッター』（一八四四年創刊）に一八五四年から一八五七年まで連載した詩の架空の作者に、クスマウルが「ゴットフリープ・ビーダーマイヤー」と名付けたものである。その後、アイヒロットが同種の作品集や詩集を刊行したため、一般には彼の命名と考えられている<sup>6</sup>。

「正直者」または「愚直な者」の意を内包するこの新造語は、嘲笑的なニュアンスで用いられた。たとえば、原子物理学者のアインシュタイン（一八七九―一九五五）が小学校時代に級友から「ビーダーマイヤー」とよばれたのは、その一例であろう<sup>7</sup>。

## 2 ビーダーマイヤーの時代背景

— 十九世紀前半のドイツ社会の状況 —

ドイツにおける近代市民社会の形成期には、イギリス、フランスのような典型的な市民革命は実現せず、ドイツの市民階級が自らの力で政治的主導権を確立することとはなかった。ウィーン体制下で三五の領邦国家、四つの自由都市に分裂していたドイツの政治的状況が、近代市民社会の形成の大きな足かせとなっていた。一八四八年の三月革命において、フランクフルト国民議会がドイツ統一に向けてプロシア国王を推戴しようとしたにもかかわらず、プロシア国王自身に拒否されて挫折したことは、ナショナリズムだけでは解決できないドイツ統一問題の複雑さを物語っている。さらに、十九世紀中頃に実現したドイツの産業革命は必然的に労働者階級を生み出した。近代市民社会形成期のすぐ後には、中産階級と労働者階級との対立という深刻な社会問題と、プロシア主導の力によるドイツ統一の動きが迫っていた。すなわち、ビーダーマイヤー時代は、戦争と革命との間の比較的平和な時代といえるのである。

この時期のドイツ社会では、生産技術の発達、工業化の進展により、生産力が飛躍的に向上した。ドイツ関税同盟（一八三四）による経済的統合、鉄道の敷設（一八三五）や汽船の就航による大量輸送などにより、ドイツも本格的な近代経済社会に移行しつつあった。学問・技術の面でも、新しい研究型大学であるベルリン大学（一八一〇）などの総合大学、技術者養成のための高等技術学校（一八二一他）などが各地に整備され、電気・通信などの物理学、有機化学や医学、また、実証重視の歴史学、ドイツ観念論の哲学などのめざましい発展があった。

復古体制の維持を図る旧勢力は、検閲制度に象徴されるように、市民的自由およびドイツ統一に向けたナショナリズムを徹底的に弾圧した。その一方で、経済力を有する市民階級に譲歩せざるを得ない現実もあった。その結果、「『政治』という禁句に触れないかぎり、市民たちには、ある程度の自由な活動領域が黙認され<sup>8</sup>」ていたのである。

こうした状況のもと、市民階級は、もっぱら非政治的・私的領域に幸福を追求した。人々は家庭内を美しく

飾り、流行を追ひ、社交や美食を楽しんだ。知識や教養を重視し、地域や歴史への関心を深め、読書、合唱などの「フエライン」とよばれるクラブ・サークルの活動に参加した。また、シュテッデル美術研究所（一八一五）のような美術コレクションの公開、グリム兄弟による民話の収集やドイツ語の研究が行われ、ブロックハウスやマイヤーの百科事典の刊行が好評を博したのもこの時代のことである<sup>9</sup>。こうして独特の市民文化が形成されたのである。

ビーダーマイヤーという言葉が造られた一八五〇年代には、すでにビーダーマイヤーの時代は終わっていた。産業革命による急激な社会変化の波に飲み込まれた人々は、過ぎ去った時代のことを「ぼっかりと青空がのぞいたような、つかの間の心なごむ小春日和のような時期」<sup>10</sup>と懐古し、理想化したのである。

3 二十世紀初期におけるビーダーマイヤー理解の変化  
当初やや否定的な含意をもなっていたビーダーマイヤーという言葉は、二十世紀初期から市民文化を肯定的・積極的に評価する意味に転換し、家具調度、文化・

社会全般、絵画、文学の各分野で順次用いられるようになる。

ふたたび百科事典の記述によると、つぎのように紹介されている。

「一九〇〇年から家具調度の分野で、ナポレオン時代の装飾的で力強いアンピール様式に対し、それ以後の簡素で実用的な家庭的温かみのある様式を示す言葉として使われ、一〇年頃には、ナポレオン以後三月革命までの時代全体を指す用い方がなされるようになった。（略）」

美術史においては、リヒター、シュヴィント、シュピッツヴェークに代表される、極めて写實的に牧歌的情景を描く風俗画的傾向を指すものとして、二〇年代から使われるようになった。そして三〇年代になると文学史概念としても用いられるようになり、ここではその適用範囲をめぐって種々の論争が行われたが、一般にはグリパルツアー、メーリケ、ドロステ・ヒュルスホフ、シュタイフター等、保守的内向的な一面は持つけれども、写実主義文学への道を準備する新しい文学表現を開拓した一群の作家たちと理解されている。<sup>11</sup>

このようなビーダーマイヤー理解の変化の背景とし

て、ナポレオンのフランスに勝利したドイツのナショナリズムが、十九世紀前半のビーダーマイヤー時代の基底にあったのと同様に、二十世紀初期におけるドイツ民族意識の高揚が影響しているものと考えられる。ドイツ統一（一八七一一）と産業革命（一八四〇代―七〇代）を経て、強大な軍事力と経済力により「世界政策」に進化するウィルヘルムⅡ世統治下のドイツ帝国の時代（一八八八―一九一八）に、すぐれてドイツ的なものを過去にもとめたとき、その一つがビーダーマイヤーであった。それは、フランスの影響を脱した、真のドイツ文化の形成であると認識されたのである。

このドイツ帝国の時代は、第一次世界大戦の敗戦（一九一八）によって終止符をうつが、ワイマール時代（一九一九―一九三三）およびナチス・ドイツ時代（一九三三―一九四五）にも、ドイツ民族意識を強調する精神構造は生きつづけた。一九〇〇年頃から一九三〇年代におよぶビーダーマイヤー理解の変化は、一貫してドイツ民族の自意識に裏打ちされているのである。

#### 4 「創られた伝統」としてのビーダーマイヤー

二十世紀初期のビーダーマイヤー理解では、十九世紀前半の社会文化状況がそのまま評価されたわけではない。二十世紀初期のドイツにおいて望ましい内容に変化しているのである。実際のところ、十九世紀前半は、強烈な政治意識が醸成された時期でもあった。その政治意識は、ビーダーマイヤーが幕を降ろす年に、マルクスとエンゲルスによる『共産党宣言』の出版（一八四八）として結実するのである。共産主義革命の実現可能性が語られていたという現実に対し、ビーダーマイヤーは、あくまでも非政治的な文化・時代のイメージである。

この二十世紀初期のビーダーマイヤー理解の歪みは、たとえば以下のことからも容易に推測できる。百科事典に紹介されている文学史上の四人の文学者たちについて、その生没年を示すと、グリルパルツァー（一七九一―一八七二）、メーリケ（一八〇四―一八七五）、ドロステ・ヒュルスホフ（一七九七―一八四八）、シュティフター（一八〇五―一八六八）である。一八一七年の作品で成功をおさめたグリルパルツァーは別として、他の三人は一八三〇年代、四〇年代から作品を発表しており、特にシュティフターは、代表作の『石さまさま』

(一八五三)や『晩夏』(一八五七)が示すように、ビ  
ーダーマイヤー時代よりも後が中心的な活動時期に当た  
っている。

このように、二十世紀初期のビーダーマイヤー理解  
は、年代的にはビーダーマイヤー時代後期またはそれ以  
降の人々をとりあげている<sup>12</sup>。それは、意図的にその内  
容を非政治的、牧歌的調和的あるいは諦観的なものに限  
定するためである。歴史上の一部の事実を選択的に重視  
して、それによって歴史理解の内容を変えてしまってい  
るという点で、ビーダーマイヤーは、「創られた伝統」<sup>13</sup>  
に類するものである。

### 三 ビーダーマイヤー文化の特徴

#### — 現象面とその背景 —

#### 1 現象面からみたビーダーマイヤー文化の特徴(一)

##### — 家具の視点から —

ビーダーマイヤー文化の特徴を、家具と絵画の分野に  
おいて具体的にみることにする。

写真1は、現在は記念館となっている作曲家メンデル

写真1



スゾーン（一八〇九—一八四七）の旧宅の内部<sup>14</sup>である。彼は裕福な銀行家の生まれであるが、ブルジョアの邸宅というイメージからすると、すっきりとした美しさがあるものの、やや華やかさに欠ける感がある。このように、ビーダーマイヤー様式の家具や内装には、装飾を排した、直線的、機能的な特徴がある。フランスでは、十八世紀のロココ様式の後、ナポレオン時代には古代ギリシャ・ローマ、古代エジプトを範とする新古典主義のアンピール（帝政）様式に移行した。アンピール様式のドイツ的展開がビーダーマイヤー様式とする理解もある<sup>15</sup>が、豪華で権威主義的なアンピール様式と、簡素を旨とするビーダーマイヤー様式との差異は大きい<sup>16</sup>。

合目的な簡素さの特徴とするデザインは、ドイツ民族の嗜好とも合致するためか、その後もドイツのデザイン史上たびたびあらわれる。十九世紀末から二十世紀初頭に流行した、優雅な曲線で知られるアール・ヌーヴオー様式は、ドイツでは「ユーゲント・シュティール」として、オーストリアでは「分離派（ゼッツショニズム）」として展開したが、フランスにおけるものと比較すると、そこには直線的な特徴がみられる。モダニズム

のドイツ的展開であるバウハウスの運動などにも非装飾的、直線的傾向はくり返されている<sup>17</sup>。

また、簡素で機能的なビーダーマイヤー様式の特徴を示すものとしてトーネット（一七九六—一八七一）の曲木椅子がある。彼は、メッテルニヒの招きでウィーンに移住し、宮廷の注文に応じながらも、早くから部品の規格化や流れ作業による量産を志向した。のちに大量生産に成功し、当時のカフェ、劇場、事務所などを彩るものとなった<sup>18</sup>。

しかし、ビーダーマイヤー様式の簡素さや機能性は、単にドイツ民族の嗜好に由来するだけではなからう。宗教的迫害からアメリカに渡り、宗教的共同生活を行ったシェーカー教徒の家具は、簡素な美しさと堅牢性で高く評価されている。平等主義の信条から装飾を排した<sup>19</sup>シェーカー教徒と同じく、装飾のオーラを否定したビーダーマイヤー様式には、平等主義への志向性が見えがえる。

## 2 現象面からみたビーダーマイヤー文化の特徴（二）

### — 絵画の視点から —



ビーダーマイヤーの代表的な画家としては、リヒター（一八〇三〜一八八四）、シュヴィント（一八〇四〜一八七二）、シュピッツヴェーク（一八〇八〜一八八五）があげられる。彼らの絵画は、人々の生活をテーマとして、小さきものへの愛情と、牧歌的雰囲気には満ちている。そこには風刺があつたとしても、挑戦的ではない。風景画にしても、荘厳な自然や深遠な精神世界ではなく、親しみのある、等身大の世界を描いている。写真2は、山中での急な雷雨にとまどい、あわてる姿を写したリヒターの絵画<sup>20</sup>の一部分である。素朴な庶民の暮らしを同じ目線で優しくとらえていることが感じられるであらう。

その他に、ビーダーマイヤーの画家としてメンツェル（一八一五〜一九〇五）もとりあげられる。『フリードリヒ大王伝』（一八三九）の挿し絵で成功を収め、代表作のフリードリヒ大王を描いた『フルート・コンサート』（一八五二）などの歴史画は、みずみずしい臨在感にあふれている。

ビーダーマイヤー絵画の範疇ではないが、この時代の王侯貴族の肖像画にも、従来とは異なる傾向がみられ

写真2



る。当時のオーストリア皇帝一族を描いた絵画<sup>21</sup>は、威厳に満ちた皇帝の姿よりは、家族愛を強調するかのようにあり、「平服をきた『市民的』皇帝の姿であり、日常の業務にいそしむ公務員としての皇帝の姿」<sup>22</sup>であると評価されている。

同様のことが、メンツェルの描くフルートを演奏するフリードリヒ大王の姿にも指摘できる。煌々たるシャンデリアの光に照らし出されたフリードリヒ大王は、権力者の威厳によるのではなく、その音楽の才能によって光り輝いているように思える。そこには個人の能力によって評価される市民階級の価値観がうかがえるのである。

### 3 社会的状況からみたビーダーマイヤー文化の特徴

ビーダーマイヤー文化の具体例からは、平等主義的な特徴がうかがえる。これは当時のドイツの「新旧勢力の均衡状況」に由来するものである。ドイツでは、新旧勢力の拮抗状況が、市民革命によって勝敗がつくにいたらなかった。新勢力である市民階級は、政治的に抑圧され、一方、復古主義のおかげで元の地位にもどった旧勢力の貴族階級には、昔ながらの力はすでない。両勢力

とも時代を謳歌できない均衡状況のなかで、ビーダーマイヤー文化が形成されたのである。

その結果、市民階級もことさら富や力を誇示するような衛生的な趣味をもたず、貴族階級も市民階級も同じような文化を共有した。オーストリアでは皇帝の宮廷においても、市民用の品々を使用するようになり、「家具・調度品類も様式においては、裕福な中産階級の物と少しも違わぬ」<sup>23</sup>という状況にいたるのである。ビーダーマイヤー時代には、貴族階級と市民階級との文化的距離は、お互いに反発しながらも案外近接していた。

山崎正和は、ウィーンにおいてビーダーマイヤー絵画の回顧展をみたときの印象をつづった短いエッセーのなかで、「ブルジョア階級の美意識を表現した」ビーダーマイヤーの時代に、「自分の生活を静かに肯定し、自己嫌悪に汚されていない」ブルジョア階級が描かれたことが、同時代のほかの国には珍しいと指摘している<sup>24</sup>。山崎もビーダーマイヤー時代のドイツの市民階級に、ひかえめな文化的特殊性を見出しているであろう。

## 四 日本におけるビーダーマイヤー研究

## 1 日本におけるビーダーマイヤー研究史(一)

—一九三九年—

日本における最初のビーダーマイヤーの体系的紹介は、吹田順助『ビーダーマイヤー文化』(一九三九)によるものである。東京商科大学教授、中央大学教授などを歴任したドイツ文学者である吹田(一八八三—一九六三)は、ビーダーマイヤーについて、「文学上の一つの様式として文学史家の間で問題となり出したのは、ドイツでも最近十年來のこと」<sup>25</sup>と述べている。ここに一九三〇年代のドイツ文学史上の議論の影響がうかがえる。

のちに吹田は、平凡社の旧版『世界大百科事典』(一九六七)の「ビーダーマイヤー」の項目を執筆するが、その基本的な考え方に変化はない。本稿では、平凡社『世界大百科事典』(一九八八)の記述を中心にみているが、吹田の見解をおおむね踏襲している感がある。

同じ一九三九年、小説家の佐藤春夫が短編小説「びいだあ・まいやあ」<sup>26</sup>を発表している。これは、ウィーンで日本人留学生が零落した貴族夫人から家具調度類を購入する話であり、ヒトラーによる欧州戦乱の時期にそれを回顧するという、まさにビーダーマイヤー的な内容で

ある。佐藤は「ビイダア・マイヤア」といふのは言はば維納風のロココ」であると、家具調度の様式の意味で用いているが、おそらくは文学史から得た知識であろう。

その後、日本のみならず、おそらくドイツでも、ビーダーマイヤーは論じられなくなる。ある日本のドイツ文学者は、一九六六年の論文に「一九三〇年代に最も盛んに論じられたのが、最近は題目として顧みられないか、全く承認されないかである」<sup>27</sup>と、その当惑を記している。ナチス・ドイツ時代の過剰なドイツ民族意識を批判的にせよ反映した一九三〇年代のビーダーマイヤー理解が、時代遅れとして放棄されたのは当然のことであろう。

## 2 日本におけるビーダーマイヤー研究史(二)

—一九九三年—

その後、美術史の分野などでビーダーマイヤーに関する研究が散見されるが、その状況が大きく動くのは、一九九三年である。この年、ベーンの著書の翻訳『ビーダーマイヤー時代—ドイツ十九世紀前半の文化と社会』と、前川道介の『愉しいビーダーマイヤー』<sup>28</sup>が出版さ

れる。前者は、一九一一年にドイツ（プロシア）の文化史家が、十九世紀前半の文化と社会の様相を、豊富な情報により描写したものである。そして、この著書自体が二十世紀初期のビーダーマイヤー理解を象徴するものである。後者は、「本邦ではまだ本格的に研究がなされていないこの時代の文化史に缺を入れ、一般の読書人にも興味があると思われるこぼれ話を集めたもの」と、ドイツ文学者である前川は、あとがきでのべている。

この時期の前後からビーダーマイヤーに関するいくつかの研究<sup>29</sup>が発表されるようになり、研究状況の変化がみられるのである<sup>30</sup>。

## 五 市民文化としての江戸後期とビーダーマイヤー

### 1 江戸後期とビーダーマイヤー（一）

#### — 富士川論文の概観 —

以上紹介した日本におけるビーダーマイヤー研究は、主にドイツ文化の側からのものであるが、日本文化の側からのアプローチとして、富士川英郎の論文「江戸後期とビーダーマイヤー」<sup>31</sup>がある。このなかで、富士川

は、江戸後期とビーダーマイヤーの二つの時代の文化を「市民の文化」という共通性で理解している。

富士川は、「寛政から文化を経て文政に及ぶ約三〇年間」（一七八九～一八一八）を「江戸の文化がもつとも爛熟した時代」<sup>32</sup>と認識している。一般に、文化年間（一八〇四～一八一八）および文政年間（一八一八～一八三〇）は、「文化文政」、略して「化政」とよばれ、江戸の町人文化が栄えた江戸後期文化の中核である。この時期を、豪華な生活を好んだ「前將軍」徳川家斉の時代という意味で、「大御所時代」とよぶこともある。この場合は、一七八七（天明七）年の家斉の將軍就任から一八四一（天保十二）年の彼の死去までをさす。天保の改革（一八四一～一八四三）以降のきびしい時勢に対し、華やかな昔を懐かしんだ人々が用いはじめた<sup>33</sup>という点で、ビーダーマイヤーの名称と似た経緯がある。

さて、富士川は、漢詩の時代による変遷を中心に論じている。儒者の余技に過ぎなかった江戸初期を経て、江戸中期には唐詩を範とした格調高い詩が作られたが、個性に乏しく、日本的な情緒を欠くものであった。それが、江戸後期には宋詩を範として現実化・日本化した詩

作が社会の各層に広まり、個性主義、写実主義の影響を受けた多くの詩人たちが活躍したのが、寛政から文化文政時代であると説明する。そして、それらの漢詩を具体的に検討し、①詩的写実主義に通じる、②題材を身近な日常生活や、日常の瑣事に求める、③田園や郷土の親しみ深い自然を歌う、という点で、ピーダーマイヤーの詩人たちの詩と共通する特徴を指摘している。

さらに、富士川は、漢詩以外にも、ピーダーマイヤー文化との類似を江戸後期文化に見出している。すなわち、絵画の分野では、円山派の写生画、谷文晁の洋画に影響された絵画、司馬江漢の西洋画など。学問の分野では、蘭学の隆盛、本草学・医学の発達、本居宣長『古事記伝』の歴史学、塙保己一『群書類従』の編纂などをあげている。

## 2 江戸後期とピーダーマイヤー（二）

### ―検討と考察―

長らく平和が続いた江戸後期、硬直的な体制のもとで、経済発展の成果を享受できなかった武士階級に対し、経済力を向上させた町人・農民階級は、労働にげ

むとともに、教育・教養を重視し<sup>34</sup>、余暇を楽しむ余裕も得つつあった。しかし、農地の集積、在郷商人の成長、問屋制家内工業の発展などの現象が、結果的に、町人・農民階級の階層分化を進め、社会矛盾をもたらした。

文化文政時代の前後をみると、まず、寛政の改革（一七八七―一七九三）と天保の改革（一八四一―一八四三）の「政治改革の時代」である。これらは幕藩体制の強化をめざす反動的復古的な改革であり、緊縮財政、商品経済の抑制、奢侈の禁止、学問文化の統制などの「抑圧の時代」であった。そして、天明の大飢饉（一七八二―一七八七）や天保の大飢饉（一八三三―一八三六）などが社会不安を招き、百姓一揆が多発した「大飢饉の時代」でもあった。

これらの間に位置する文化文政時代は、一時的に平和な安定期である。社会経済的には、一種の積極財政によるインフレ時代であり、商工業が発展し、享乐的な文化が栄えた。その反面で階層分化が進行し、つぎの時代の社会矛盾の原因となった。ピーダーマイヤー時代が、戦争と革命との間の一時的に平和な時代であり、経済、社

会、学術文化面での進展の一方で、産業革命の進行が労働者階級を生み出し、次代の新たな階級対立を準備したことと、よく似た社会的状況にあった。

江戸後期における町人文化の発展は、さまざまな分野でみられた。大衆演劇である歌舞伎が幅広い人気を博し、衣装の流行<sup>35</sup>などの大きな社会的影響があった。外食文化が発展し、庶民向けの飲食店が繁盛する一方、贅沢な料亭が生まれた<sup>36</sup>。これらはビードーマイヤー時代の「流行」、「美食」を思い起こさせる。また、俳諧・狂歌などの文化活動を目的とする「連」<sup>37</sup>とよばれるグループが活動をきそつたが、これはドイツにおける「フエライン」に比較できる。町人経営の庭園「向島百花園」の公開（一八〇五）<sup>38</sup>、菅江真澄による秋田の地誌の編纂<sup>39</sup>などは、収集と保存という博物学的関心の高まりを示している。

加うるに、小さきものへの愛情と牧歌的雰囲気を連想させる小林一茶（一七六三～一八二七）の俳句、良寛（一七五八～一八三一）の和歌、また、親しみやすさ、等身大の世界という点でビードーマイヤーの絵画に相通じる葛飾北斎（一七六〇～一八四九）の『富嶽三十六

景』、歌川広重（一七九七～一八五八）の『東海道五十三次』もあげられよう。

江戸後期においても、改革期の弾圧の経験により、町人文化には非政治的傾向がみられた。停滞している武士階級と、経済力を伸長させている町人・農民階級との力の相対化もあいまって、「新旧勢力の均衡状況」が存在したと考えられる。武士階級も、町人文化を享受し<sup>40</sup>、それに直接関与する<sup>41</sup>など、文化面における支配階級と被支配階級の融合現象も発生していた。このように、江戸後期とビードーマイヤーとは、さまざまな点において類似性が指摘できるのである。

### 3 江戸後期文化の評価の変遷

吹田は、「市民的になつたドイツ運動」というビードーマイヤーの定義から、江戸時代との比較を試みながら、結果として江戸後期文化を評価していない<sup>42</sup>。これは、一九三九年の吹田と一九六八年の富士川との時代の差といえる。実は、この間に、江戸後期文化の歴史的評価の変遷がみられるのである<sup>43</sup>。

江戸後期文化の中心である化政文化は、「元禄文化に

くらべて墮落した町人文化、頹廢爛熟した文化」<sup>44</sup>と長らく評価されてきた。この評価が変化するのは一九六〇年代である。その先駆的論者である西山松之助は、一九六四年の論文において、文化文政時代の富裕町人・豪農層の文化的状況を具体的事例によって示し、この時期の文化を、絶大な権力のもとに抑圧されていた町人の「消極的抵抗の文化」<sup>45</sup>であるとの評価を示した。

また、林屋辰三郎編『化政文化の研究』（岩波書店、一九七六）では、日本における市民文化形成の観点から、文化文政時代の総合的な再評価が進められた。このなかで、林屋は、江戸後期を「近代国家の前提として理解」<sup>46</sup>し、「化政期・幕末期を通じて『市民文化の形成』といういわば近代化の方向が、従来考えられたように西洋文明として輸入されたというよりも、国内において自生する傾向にあった」<sup>47</sup>と指摘するにいたるのである。

富士川論文の内容は、この新たな評価に立脚している。二十世紀初期のビーターマイヤー理解の変化よりも遅れるものの、市民文化を評価する動きは、日本でも同様に行われたといえるのである。

## 六 日本文化史理解における今後の課題

### ―市民文化の視点から―

日本文化史、特に茶の湯の歴史について調べている筆者は、偶然ビーターマイヤーに出会い、若干深入りをしてしまったようである。日本人好みの直線的デザインに魅せられたこともあるが、ベーンや前川が紹介する、なにごとにも食欲な好奇心を示し、自己を成長させようとする積極的なドイツの市民階級の姿に、江戸後期の文化状況との並行性を感じたからである。

現在におけるビーターマイヤーの評価は、厳密な時代区分ではなく、十九世紀前半、あるいは十九世紀全般の文化様式・時代状況を示すものと理解されている<sup>48</sup>。この時期のドイツの市民階級の特徴を「教養市民層」とする研究<sup>49</sup>もある。教養市民層とは、高等教育を修めることによって官僚などの社会的威信の高い職業についた市民たちのことであるが、彼らは、文芸、音楽などの芸術活動に真の教養をもとめ、自己完成への努力をする過程に価値をおいていた<sup>50</sup>。このことが、茶の湯、生花、謡いなどの芸能の習得に努めた江戸後期の民衆のことを連

想させるのである。すでにのべたとおり、ドイツの「フエライン」と江戸後期の「連」との類似も指摘できるが、これらの集団には、市民社会的な平等主義の考え方が共通している。そこでは社会的身分の枠を越え、共有する目的のために行動していたと思えるのである。

もちろん、このような理解が妥当であるのかどうかは、詳細な検討が必要であり、筆者もその印象を安易に主張するわけではない。そのことよりも気になるのは、その後の展開における相違である。ドイツのフエラインが、芸術、文化のみならず、スポーツその他の分野において、その後さらに発展しながら存続するのに対して、日本では、特に一部の遊芸・芸能は、巨大な家元制度に支えられて現在にいたっている。これは、江戸後期に到達しつつあった市民社会的な平等主義の方向性と、まったく逆行するものといわざるを得ない。

家元研究でも新機軸を打ち出した西山は、江戸時代の民衆が文化を受容する現象を、閉鎖的身分社会における民衆の自己解放と評価している。すなわち、「上昇してきた民衆にとって、そこに待ち構えていたものは、きびしい身分制度の枠であって、彼らにはほとんど市民的自

由が許されていなかった。市民的自由をもちえなかった彼らは、その補償的あこがれとして、遊芸の世界に没入した」<sup>51</sup>とのべている。この限りではビーダーマイヤーとの並行性が指摘できるだろう。しかし、家元制度によって担保された「民衆の自己解放」は、手放しに評価できるものなのだろうか。それは人々が新たなヒエラルキーに組み込まれていく過程でもある<sup>52</sup>。西山は、江戸後期の民衆が茶の湯などの文化を主体的に享受する姿を描写する。しかし、家元を中心とする視点からは、彼らは、文化の主体ではなく、家元から文化を与えられる客体として色あせたものとなってしまっているのである。

家元制度によって文化が維持発展されてきたと評価する議論もあるう。しかしながら、ドイツの事例が示すように、市民社会的な平等主義志向の集団による道もありえたのである。ヨーロッパの貴族階級と比較するとき、江戸時代の特権階級すなわち武士階級は、脆弱な存在<sup>53</sup>であり、明治維新とともに過去のものとなった。ところが、家元は、現在の日本においても伝統的権威を保ち続けている。日本文化史における所与の条件ともいえる家元制度の存在は、比較文化の視点から、また異なった評



価も可能であろう。

茶の湯の歴史では、明治維新時に家禄を失った茶の湯の家元が長らく経済的に困窮し、新時代に対応する努力を強いられたという記憶があるためか、近世と近代との間に断層をみる傾向が強い。しかしながら、林屋の江戸後期の理解は、近世から近代への連続性を考えるものであることはすでにみたとおりである。そこで、日本における市民文化発展の一例として考えるならば、近世から近代への茶の湯の歴史もまた違った姿をみせるのではないだろうか。ビーターマイヤーは直接役立つものではないとしても、そこから学んだ視点を生かして、今後茶の湯の歴史の考察を深めたいと考える。

(国際文化学研究科

博士課程前期課程)

〇〇七、一二〜一三頁。

2 石田千尋「オランダ船の紺青 (Berlijns Blaauw) 輸入について」前掲書、二〇頁。

3 Bedermeier は、「ビーターマイヤー」の方が原語に近いが、慣用的に「ビーターマイヤー」の表記が用いられることが多いので、それに従う。

4 『世界大百科事典』第二十三巻、平凡社、一九八八、五一五頁「ビーターマイヤー」の項目、石井不二雄執筆。

5 「三月前期」の「三月」は一八四八年の三月革命を意味する。狭義では一八三〇年の七月革命から一八四八年まで、広義では一八一五年から一八四八年までをさす。

6 前川道介『楽しいビーターマイヤー』国書刊行会、一九九三、一四〜一五頁。

7 P・フランク著、矢野健太郎訳『アインシュタイン』岩波書店、一九五一、一三頁。

8 山之内克子『ウィーン・ブルジョアの時代から世紀末へ』講談社、一九九五、一七頁。

9 服部尚己「ビーターマイヤーの諸相―十九世紀ドイ

1 勝盛典子「空がこんなに青いのは―近世日本におけるブルシアンブルー受容の諸相―」『西洋の青―ブルシアンブルーをめぐる―』神戸市立博物館、二

- ツ文化研究―』『同志社女子大学学術研究年報』第五十卷Ⅲ、一九九九、一四三―一四八頁。
- 10 神林恒道編『ドイツ・ロマン主義の世界―フリードリヒからヴァーグナーへ―』法律文化社、一九九〇、一八五―一八六頁。
- 11 前掲『世界大百科事典』五一五頁、「ビーダーマイヤー」の項目。
- 12 『世界文学大事典』第五卷、集英社、一九九七、六五三頁の「ビーダーマイヤー」の項目では、「文学史の時代概念として使うのは慎重にすべき」と指摘する。
- 13 伝統が、「その実往々にしてごく最近成立したり、また時には捏造されたりしたもの」という考え方。エリック・ホブズボウム「序論―伝統は創り出される」ホブズボウム、テレンス・レンジャー編、前川啓治、梶原景昭ほか訳『創られた伝統』紀伊國屋書店、一九九二、九頁。
- 14 写真の撮影および提供は、神戸大学大学院国際文化学研究科藤野一夫教授による。記して感謝申し上げます。
- 15 ペーター・パレンツァン「帝室とビーダーマイヤー時代のウィーンの住い文化」『十九世紀ウィーンへの旅―花開くビーダーマイヤー文化―』名古屋市博物館、二〇〇三、一八九頁。
- 16 ビーダーマイヤー様式には、装飾性の高いフランスの様式よりも、むしろ質実なイギリスの様式の影響が指摘される。吹田順助『ビーダーマイヤー文化』弘文堂書房、一九三九、二五頁。マックス・フォン・ペーン著、飯塚信雄ほか訳『ビーダーマイヤー時代―ドイツ十九世紀前半の文化と社会』三修社、一九九三、四七六頁。
- 17 デザインの変遷については、トーマス・ハウフェ著、藪亨訳『近代から現代までのデザイン史入門 一七五〇―二〇〇〇年』晃洋書房、二〇〇七、四一―四二、四九―五〇および六九頁参照。
- 18 ハウフェ、前掲書、三〇―三一頁。
- 19 阿部公正監修『世界デザイン史』美術出版社、一九九五、二二頁。
- 20 Adrian Ludwig Richter "Gewitter am Monte Serone bei Olevano im Sabinergebirge" 〆

- 21 テーデル美術館所蔵。写真の撮影は筆者。  
前掲『十九世紀ウィーンへの旅』八四頁、二三三頁。
- 22 新井裕「まえがき」中央大学人文科学研究所編『ハプスブルク帝国のビーダーマイヤー』中央大学出版部、二〇〇三、vi頁。
- 23 パレンツァン、前掲論文、一八九頁。
- 24 山崎正和「『ビーダーマイヤー』の僥倖―またはブルジョア階級の文化的不幸について」『一冊の本』二〇〇〇年一月号、朝日新聞社、二〇〇〇、八八頁。
- 25 吹田、前掲書、一頁。
- 26 「びいだあ・まいやあ」『定本佐藤春夫全集』第十巻、臨川書店、一九九九、二九〇〜三〇五頁。初出は『中央公論』第五十四年第十二号、中央公論社、一九三九。
- 27 徳沢得二「ビーダーマイヤー文学」『専修大学論集』第三号、一九六六、一頁。
- 28 前川、前掲書。のちの「あとがき」からの引用は、三五九頁。
- 29 その後、二〇〇三年には、前掲『ハプスブルク帝国のビーダーマイヤー』の刊行、名古屋博物館における展覧会『十九世紀ウィーンへの旅―花開くビーダーマイヤー文化―』の開催があった。
- 30 この背景には、一九八〇年代のドイツ市民層研究の活性化があるのではないか。宮本直美『教養の歴史 社会学―ドイツ市民社会と音楽』岩波書店、二〇〇六、二九頁参照。
- 31 富士川英郎「江戸後期とビーダーマイヤー」芳賀徹ほか編『講座比較文学第三巻 近代日本の思想と芸術Ⅰ』東京大学出版会、一九七三、二八七〜二九六頁。ただし、初出は、東京大学国語国文学会編『国語と国文学』第四十五巻第十号、至文堂、一九六八、一二一〜一二六頁。
- 32 富士川、前掲論文、二八九頁。
- 33 林屋辰三郎「化政文化の歴史的位置」『化政文化の研究』岩波書店、一九七六、三一頁。
- 34 倉地克直『江戸文化をよむ』吉川弘文館、二〇〇六、一二一頁、一七七頁。
- 35 田口章子監修『江戸人と歌舞伎』青春出版社、二〇〇二、八八〜九八頁。

- 36 渡辺実『日本食生活史』吉川弘文館、一九六四、二二四～二二五頁。渡辺善次郎『巨大都市江戸が和食をつくった』農文協、一九八八、一三一頁。
- 37 田中優子『江戸はネットワーク』平凡社、一九九三、九～二七頁。
- 38 飛田範夫『日本庭園の植栽史』京都大学学術出版会、二〇〇二、二九〇頁。
- 39 錦仁『小町伝説の誕生』角川書店、二〇〇四、第二、三章参照。なお、菅江真澄が収集した小町伝説が天明期と文政期とで大きく変化しているが、このことは、江戸後期における地域や歴史に対する関心の高まりと評価することができる。
- 40 武士階級が歌舞伎や浮世絵を評価したことについて、田口、前掲書、一〇七～一七頁。内藤正人『大名たちが愛でた逸品・絶品 浮世絵再発見』小学館、二〇〇五、七一頁以下。
- 41 浮世絵の鳥文斎栄之、歌川広重、戯作文学の大田南畝、柳亭種彦、滝沢馬琴らは武士階級の出身である。
- 42 吹田、前掲書、一〇二～一〇三頁。
- 43 この議論に関しては、藤田覚の書評「青木美智男『文化文政期の民衆と文化』」『歴史学研究』通巻五五九号、一九八六、三四～三九頁を参照した。
- 44 衣笠安喜「化政文化論」『講座日本文化史』第六卷、三一書房、一九六二、一〇九頁。ただし、衣笠がこの考え方に固執している訳ではないことを付言しておく。
- 45 西山松之助「江戸文化と地方文化」『岩波講座日本歴史』第十三卷、近世五、岩波書店、一九六四、一八八頁。
- 46 林屋、前掲論文、四〇頁。
- 47 林屋「文明開化の歴史的前提」『文明開化の研究』岩波書店、一九七九、五頁。
- 48 ビーダーマイヤーの時代区分を十九世紀全般に広げる考え方もある。「現在では広く一九世紀全般の文化様式、時代状況を表す」新井、前掲「まえがき」、三頁。
- 49 ユルゲン・コツカ編著、望月幸男監訳『国際比較・近代ドイツの市民―心性・文化・政治―』ミネルヴァ書房、二〇〇〇。

50 宮本、前掲書、第一章参照。

51 『西山松之助著作集』第一巻、吉川弘文館、一九八二、一二三～一二四頁。

52 この点について、「庶民の茶の湯はやがて家元制の下に自由な表現力を失う」という指摘もある。矢部誠一郎『日本茶の湯文化史の新研究』雄山閣、二〇〇五、四三七頁。

53 江戸時代の武士階級の評価について、「日本では、特権階級は経済的に弱体で、その力を武器の独占と、行動様式の伝統とによってえていた。」G・B・サンソム著、金井圓ほか訳『西欧世界と日本』下巻、筑摩書房、一九六六、七三～七四頁。

なお、引用文中の漢字は通用のものに改めた。

# 〔付記〕

本稿は、平成十九年五月十七日および十月十七日に神戸大学大学院国際文化学研究科博士課程前期課程芸術文化論演習において口頭発表した内容をもとに、比較文化的視点から加筆したものである。ご指導いただいた楯岡

求美准教授および藤野一夫教授に厚く御礼申し上げます。

また、ピーダーマイヤー理解について、ご教示いただいた新井裕中央大学商学部教授に感謝申し上げます。